

大正十三年九月廿六日

横須賀海軍航空隊

吉多山省三

軍務司

原中佐殿

潜水学校、軍務保轉ノ件

御照會ノ件、周知私見左記ノ通ニ御座候

一、将来潜水艦ヲ一補足通信標國トシテ軍務ヲ活用スルノ

階梯トシテハ目下潜水校現在ノ増数増種ハ各種ノ研究及実用

西方面ヲ親テ充分トハ言難ク少クモ利用ノ機運ヲ促進スルニ

之ヲ増数ノ増加ハ効果大ナルコトヲ信ズ、今同保轉リ能ク好機ニ

増増セラル、その常ノ方々を異存ナシ

一、唯常方ニ於テ最も重要ナルタヘハ經費ノ運用及び計画管理

1903

如くして研究を進めんとし、やがて詳報をせんとす。單に先覺或知識
 著書やいふ等、僅々一月の講習ヲ以テ斯ノ生物活用ノ大問題
 ヲ輕々ニ物理學的又ハ機械學的ノ解決セントスルハ甚カシキ無謀ノ
 策ナリ。是亦吾達識見眼ノ確立將校ヲ簡接シ常ニ實際
 研究部ト氣配ヲ通ジテ目的達成ニ直捷セシムルハ非ラバ如何
 増設増修ヲ増加スルモ畢竟單ニ學子採用ノ通流模範トシテ
 存在スルカ又ハ甚シキニ至リテハ、鑑智モ通ニ土塲化スルニ至ルベシ
 施設横濱等皆適例ニシテ其地ノ分業の遂行モ多クハ其例
 ニ倣ハシムルコトモ甚ハク便知ノ術ヲ簡易視シ且其責任ノ我流
 ニテモ甚モ海軍便知術上ニ進展ヲカルストナシ或ハ甚ハク能力價値
 ノ逆宣傳ノ因リナストアリ。單ニ潜水學校採用トシテ通信校度
 ナリハ現在増設ヲ以テ殆全ク締成シ明年ノ著強ニ依リ相當ニ
 増設シテ充分ナリト信ス。

1904

三、前項記述ノ如ク實際ト潜校増研充部トハ單ニ増研講習ヲ施行シタルニ止リ何等分置所の關係モ無之然レ當方ヨリ合校増保稱ニハ中野、下野協議等ハ却テ系統違ヒニ寧ロ潜校ヨリ直接中野ト協議直ニ至ルナリト存候先年砲校ガ直接中野ヨリ掛下ヲ受ケル例モ有之候尤モ潜校ニ於テモ勝子ノ分置所モ有之候ハ手續等ニ関スル先例等合校ニ指スル際ハ悉ク候當方ニ於テモ何カ順序アリハ中野委員、中野佐ハ致シ置クベキモ近頃寸金地ニ所用モ無之候間不審事情由錦原奉稱候

[illegible]

1906

ソレナリ者一番長なる所、新船を備へ、是トテモ此兵員ノ人モ、コナウカヤシク
 同科位ノ而シテ見テソレヲ追演カウ、而ルベシ、指道スルコトヤウナリ、故
 易ナヤリ方ナクヤウ又方カ、コレトナシマス
 故モ能率ノ、分ケルニ、モシ、新船ニ使ハレ、ナラバ、操縦、新船ノ一人ニ金者、係
 ン、持、モ、コレ、相當、の、教、育、ヲ、施、シ、兵、員、モ、所、属、ヲ、操、縦、教、育、シ、ウ、シ、テ、故、ハ、故、ハ、同、ニ、操、縦、
 自、統、ノ、経、費、ヲ、省、ヘ、テ、ヤ、ウ、子、ハ、ナ、リ、モ、又、コレ、決、シ、テ、理、想、的、な、ガ、ナ、ク、實、際、的、な、コ、ト、ヤ、ウ、
 子、ハ、却、テ、能、率、ト、ナ、リ、モ、又、コレ、決、シ、テ、理、想、的、な、ガ、ナ、ク、實、際、的、な、コ、ト、ヤ、ウ、
 ス、ヘ、テ、陸、海、軍、ノ、一、方、成、績、ヲ、見、テ、モ、故、ナ、ク、年、々、リ、地、上、ヲ、操、縦、カ、マ、サ、ウ、テ、居、リ、
 マス、新、船、艦、隊、ニ、使、用、ス、ル、コ、ト、ハ、大、胆、意、ヲ、表、ス、ル、所、也、故、ハ、必、ズ、要、後、援、
 ヲ、取、リ、又、補、ト、心、配、ス、ル、ミ、デ、ス、
 現、在、の、時、代、モ、今、程、荒、廢、シ、居、ル、上、ニ、傷、ハ、大、キ、ナ、モ、操、縦、カ、操、縦、カ、故、ハ、故、ハ、同、ニ、操、縦、
 類、々、シ、テ、今、ノ、操、縦、ヲ、一、方、コ、ト、モ、又、サ、ウ、モ、又、連、続、シ、テ、行、フ、コ、ト、テ、居、ル、コ、ト、テ、居、ル、コ、ト、
 ナ、リ、モ、故、ハ、故、ハ、同、ニ、操、縦、カ、操、縦、カ、故、ハ、故、ハ、同、ニ、操、縦、
 現、在、ノ、コ、ト、
 鋼、料

1909

庫 講堂 増設 執務 所 トシ 市 方 上ニ 最新式ノ 国産 物
 フ 新築 致サバナラヌト 存ジ 案 断中デ 即座 イマス 将来 各 院 院 へモ
 勿 論 更ニ 是ハ 是レ 共人 物ノ 育 成 振 興ヲ 要スル 所 ナラシム
 飼 料 庫 等モ 現 今ニ 比 向ニ 全 部ノ 倉 庫ニ 移 貯シ 置クノ 事ニ 決 断
 害アリテ 臨 介ニ 在リ 然レ 地ノ 公 有ニ 適 切デ アリマセン 是レ 共 衆
 閑 装 置ヲ 有シ 時ニ 二 硫 化 炭 素ノ 燃 焚ヲ 施シ 得ルモノデ ナク アリマセン
 施 設ノ 宜カラヌヲ 一 早 急ニ 万 事ニ 付 不 任 爲 デ アリマス
 五 飼 料ニ 就テ 所 申 出デ 又 米 等カ 方リ 多ク 元 通リニ 十 トノ 即 座 爲 可 理 化
 ノ 社 會 需 求 妙 妙デ 一 番 困ニ 此 點デ 今ノ 下 糧 米デ 非常ニ 不 廉ノ 品
 シ 運 搬入 ヲ 行ケテ 思 始 末ニ 是レ 亦 在 員ヲ 増 同 僚 者ノ 充 分ナル 檢 査ヲ
 受ケテ モ テ ナク テ ナリマセン 等モ 檢 査 力ニ 影響 有ル 下 實ニ 大 ナイニ 存 マス

1910

スレリホノ私報市長たる迄師長等系下何一機操計画一方に即ち即ちを

大演習ニ軍艦使用ノ概況及計画

一、小笠原特設航空隊増設

斯陸軍に於ては數月前より計画せし人員難及訓練難ヲ予想シテ上陸ホリシ断他
 方面より進言ニ依リシト見エ特設隊計画中之發布セシ故急遽不完全ナカ
 事前ノ協定點ヲ違フ事ナシ八月廿五日崎原ニ着セリ其日、女島海岸ニ到着
 二日既ニ奥々全小笠原完成ナレバ予想以上ノ好果ヲ以テ十日既ニ母島
 陣進ヲ進路下能ノ域ニ達セシカ計画中之殆ど全周案ナシ點ヲ即ニ耶リ同
 ニ来リシモカ其後一回母島附近ニ放テ約三分の一高目加修者ナリ生シカ
 ルノ也ニ接シテ(全射四枚ニ得タリト信ス)明日出港ノ高崎原ニ地ニ更ニ戒備
 定メテ又皆遠シヨリナレバ其後ハカハル特設隊完ニ際シテハ必ズ甲種國術校
 リ進出シトテ切望ス新機ナレハ順當ニ行フ事ヲ得ハ斯部ノ如キハ十分ノ確信ヲ有ス
 (1)協會、公新式協會、(2)從事員、鈴木普、小泉、水外、(3)母島

前記「女島」中略な最優者

1911

(ハ) 準備品件
新船計画

研究項目及後継事業員ニ與ヘル沈没船ノ調査

別紙

大演習終結後 全況及統制ノ概々

一、檢閲員 報告隊同定檢査員 移向總司令部

一、大演習期ヲ出動ノ諸艦空機ニ隨時移向行也云

使用機主トシテ南線機道區者ハ各線若使用シ得 釜山以北ハ夜間機ニ使用シ得

二、第一期演習 海峽大白ニ撤去使用也云

使用機 南線及夜間機

三、第二期演習 夕日時西大白ニ移向セシメ 入支南北線ノ警戒使用也云

使用機 中線

夜間機

備考 昨日夜間機出動後 徹夜ニ移向機ニ日没一ニ移向シテ 全夜ニ亘リ車機使用セリ 得甚成績也 優良ナルヲ可謂ス

1912

三、松浦防備隊の編成

大府員、防備隊の編成に關し、通商手続に便する由、

前記ニ三項、昨、防備隊の編成に關し、打合、決定、し、る、事、に、關、し、不、可、避、免、に、
等、分、議、に、出、席、し、御、決、定、を、積、り、に、御、座、候、

當、隊、北、西、線、路、ハ、斯、當、に、於、テ、強、ト、不、使、用、に、候、が、何、カ、演、習、中、使、用、
御、方、寸、モ、候、ハ、ハ、御、教、示、申、上、候、

序、テ、下、ウ、松、浦、防、備、隊、の、編、成、に、關、し、昨、日、に、御、決、定、を、積、り、に、御、座、候、
ヲ、申、上、ス、御、決、定、を、積、り、に、御、座、候、

目、下、大、府、員、事、務、解、任、に、關、し、各、人、の、手、續、を、完、了、す、る、に、大、方、引、出、し、小、
右、一、人、ヲ、中、々、に、御、決、定、を、積、り、に、御、座、候、

[illegible]

1914

陸軍省
陸軍部
陸軍省
陸軍部

軍鳩科準備物件			
艦上鳩舎(重量約一噸半)	一個	電鈴	一個
鳩	大	懐中電燈	一個
小型天幕	一個	ロースク	一〇本
自転車	一台	小形気圧気量計	一個
輸送籠	四個	双眼鏡	一個
携帶籠	三個	海図	一枚
飛行機用籠	六個	三角丁規	一組
作業服	三着	両脚器	一個
電池	二個	叫止笛	二
電線	一五〇米	羅針儀	一

1915

カバン	水浴器	飲水器	水槽	小飲水器	果四	篩	通信用紙	食餌器	信書管	足輪
一ヶ	一ヶ	一ヶ	一ヶ	六ヶ	六ヶ	一ヶ	一五四	一ヶ	四〇	一〇ヶ
色別足輪	飼料 (六〇兩 三分)	野菜	土塩	薬品	菓	医療具	掃除具			
一〇ヶ	二石	若干	若干	若干	若干	一式	一式			

洋 貨

1916

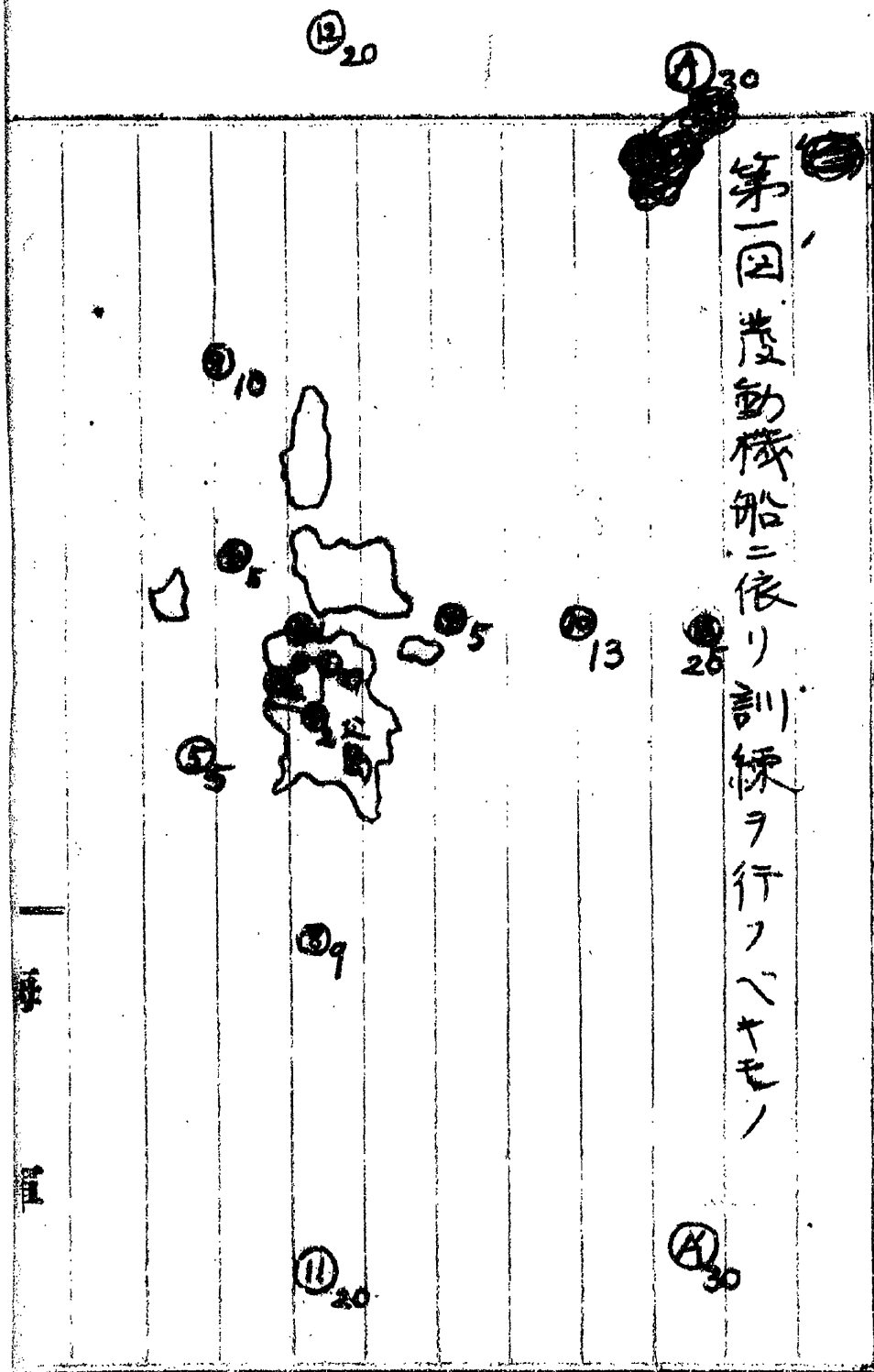
小笠原急設鳩舎訓練計畫	
七月十六日	生後四十日乃至七十日 鳩六羽収容
自七月十七日	横須賀ニ於テ訓練 開始、舍外運動ヲ 行ヒ得ル程度ニ至ラン ハ放鳩川口ハ海上 方面ヨリ三五同行ノ
八月二十日	高崎ニ搭載
自八月二十一日	高崎ニ於テ訓練 横須賀ニ於テ中舎 外運動ニ同行ノハ放 鳩川口ハ海上方面ヨリ 三五同行ノ
九月一日	鳩舎ヲ陸上ニ入ル
二日	訓練
三日	訓練
九月四日	才一回出舎
五日	才二回出舎
六日	舍外運動
七日	"
八日	"
九日	①叱咤リ訓練放鳩
十日	②③ "
十一日	④ "
十二日	休日(予備日)
十三日	⑤ "

1917

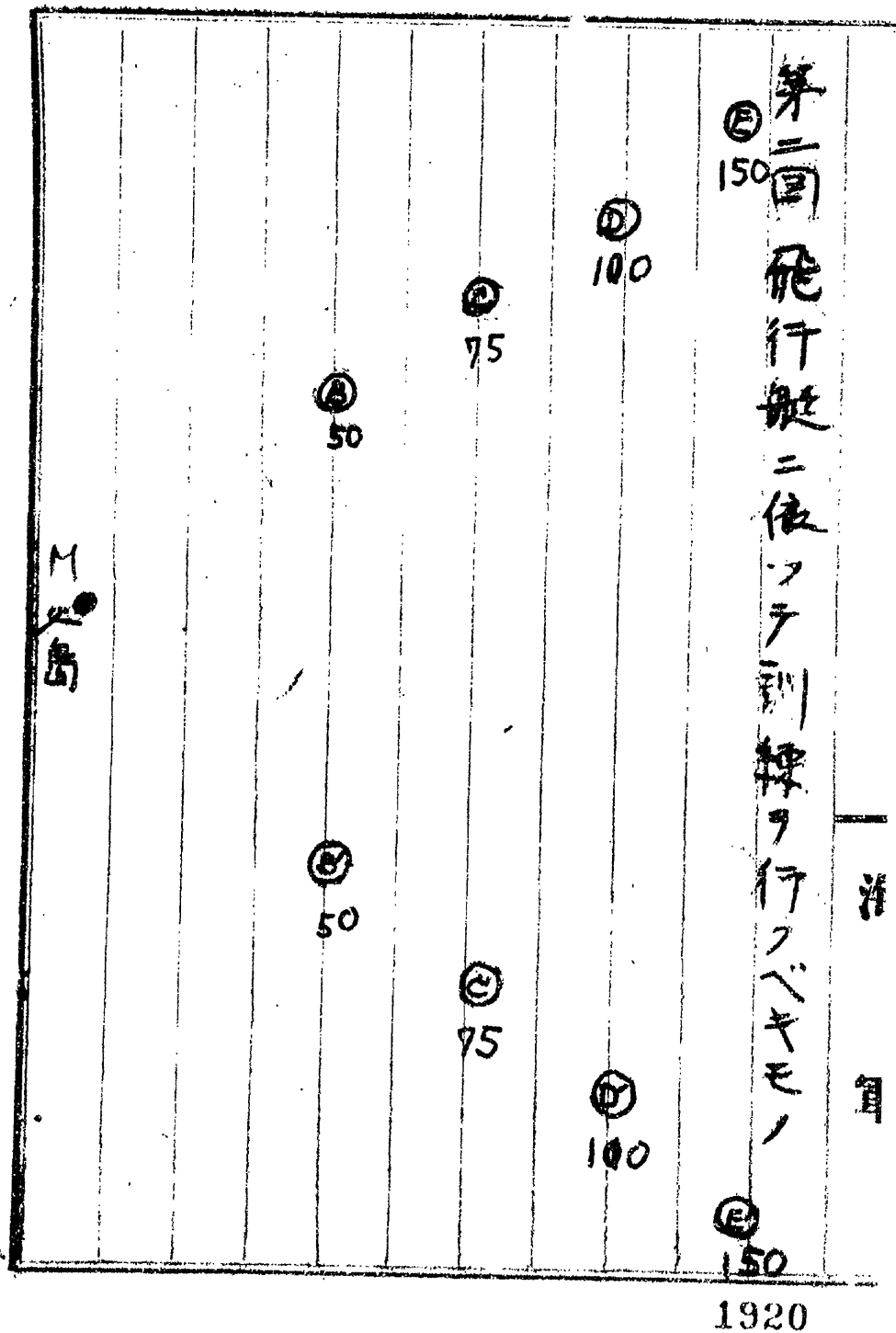
九月 十四日	⑥	地点ヨリ訓練放場	九月 二十五日	①	地点ヨリ訓練放場
十五日	⑦	"	二十六日	●	"
十六日	休日(予備日)	"	二十七日	③	"
十七日	⑧	"	二十八日	●	"
十八日	⑨	"	二十九日	②	"
十九日	⑩	"	三十日		
二十日	休日(予備日)	"	一日	④	"
二十一日	⑪	地点ヨリ訓練放場	二日		"
二十二日	⑫	"	三日	⑤	"
二十三日	⑬	"	四日	予備日	
二十四日	休日(予備日)	"	五日		
二十五日			六日		
二十六日			七日		

以上ヲ以テ一五〇料
訓練終了

1918



1919



(附記一)

①ヨリ③迄ハ荷車~~川~~ニ依ル

④ヨリ①迄ハ發動機船ニ依ル

②ヨリ⑤迄ハ飛行機ニ依ル

(附記二)

①ヨリ⑬迄ハ基礎訓練ニシテ、總數

ヲ~~川~~練シ。其ノ右ニ於テハ延伊~~川~~

練ニシテ、總數ヲニ分シテ、NE及BEノ

ニ方向~~ニ~~訓練ス

(附記三)

基礎訓練終了後ノ鳩數ハ四〇羽ノ

至五〇羽ニシテ一五〇羽~~ノ~~新訓練台ノ鳩

數ハ三〇羽乃至四〇羽ノ予定ナリ(但シ

状況ニ依リテハ二〇羽位ニナルヤモ知レズ)

一
重
置

1921

附記

訓練計畫ヲ右ノ如ク定ムト虽モ地形

天候ノ關係ヨリ一部変更スル事アルベ

シ当日帰還數三分二以内ナル時ハ

延伸ニ充分注意ヲナスベシ之レガ

タメニハ予定完成距離ヲ変更スルモ

サマタゲナシ

(附記四)

鳩舎ノ陸揚ガハ他ノモノニ先ンジテ

行ッ事

(附記五)

訓練後ニ於テ実験ノタメ一五〇料

以上ノ距離ヨリ放鳩スル事アルベシ

1922

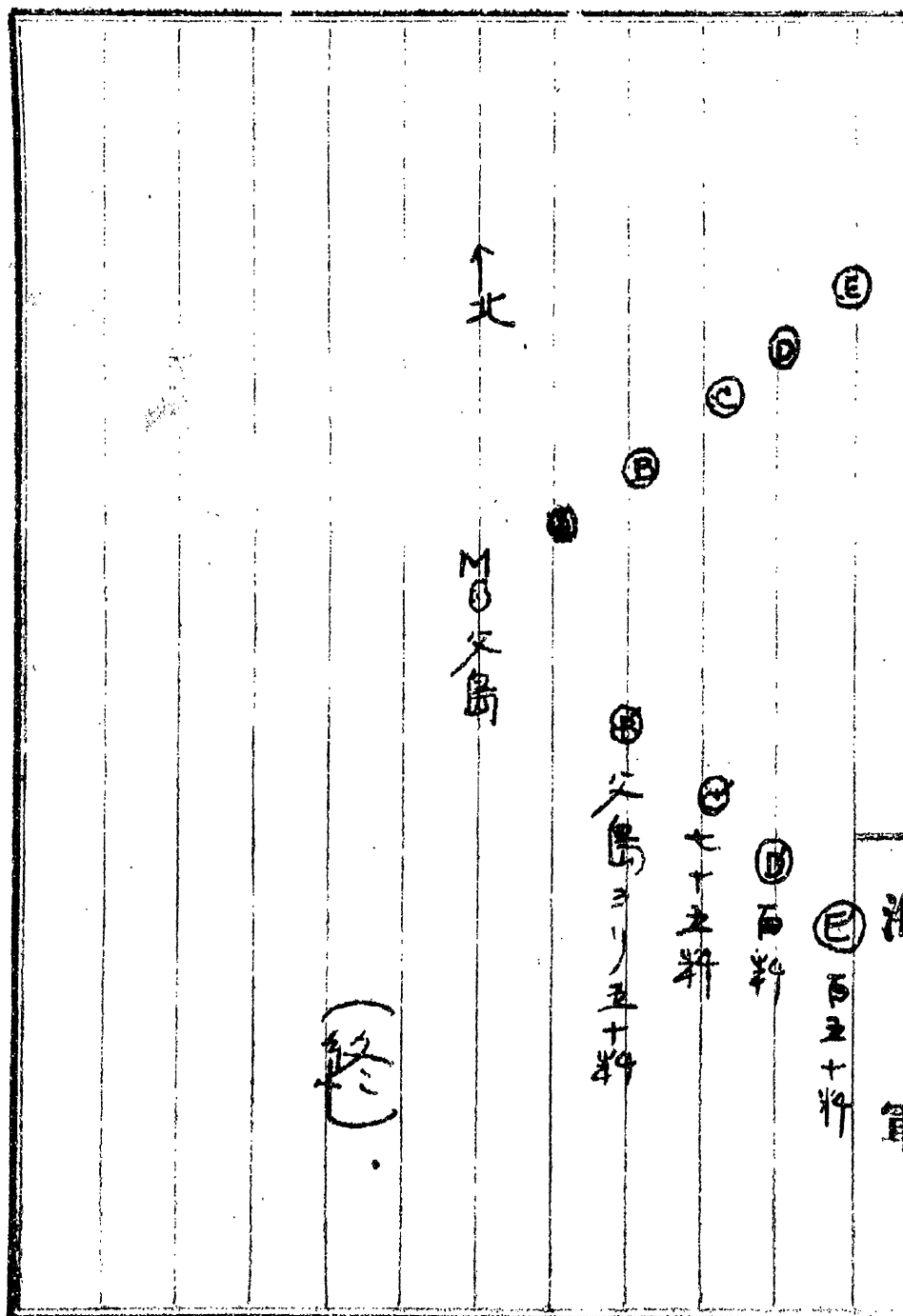
飛行艇半對スル鳩訓練上ノ希望

回次	月日	飛行艇 機路	放鳩地 点及放鳩 法	所要
一回	九月二七	M B B' M	B B' 地点ニテ各ニ十羽づ	
二回	九月二九	M C C' M	C C' 地点ニテ各ニ十羽づ	
三回	一〇一	M D D' M	D D' 地点ニテ各ニ十羽づ	
四回	一〇一三	M E E' M	E E' 地点ニテ各ニ十羽づ	都合ニ依リ 二回ニ別テ E E' ノ間隔ヲ 別ニ定メテ 行フ事

此ノ後ニ於テ四回同ノ予備日數ハ又ケタルガ故
ニ便宜變更サシテサマシゲナシ
毎回鳩兵一名鳩四〇羽便乗

一
頁

1923



1924

父島鳩舎研究項目及ヒ從事員ニ與ヘタル注意事項

一、研究項目

(イ) 何等補助目標ヲ存セサル洋上ヨリノ放鳩ト沿岸又ハ碁布セル島嶼ノ一島ヨリノ放鳩トノ取巢上ノ難易比較

(ロ) 研究員豫想 事前ノ訓練ニ當テハ前者ノ方容易カト思惟ス

(ハ) 鳩舎馴致ヲ終了セル半固定鳩舎ノ移動ニ對シ新地馴致法及其日数

(ニ) 右ニ對スル本年度産陸軍仔鳩ト海軍ニ於テ一年以上ノ海上移動ノ経験ヲ有スル艦上鳩舎鳩トノ優劣及性能ノ比較

(三) 分割式(防熱)艦上鳩舎ヲ陸上半固定式鳩舎ニ流用スルコトノ適否及ソノ防熱的效果

(ホ) 亜熱地帯地方ニ於ケル飼育管理法及蕃殖並ニ換羽促進等保健ニ關スル注意事項並ニ特種施設ノ要否

1925

- (ハ) 孤島ヲ販還目標トセル場合ノ訓練距離躍進標準及失踪率、天候風土地勢其他環境ノ訓練ニ及ボス影響等
- (ニ) 機上放鳩(各個及集團ニ就キ適切ナル放鳩法ヲ研究ス)
- (三) 將來父島ニ永久固定鳩舎ヲ建設スルモト想定シ一般施設人員經費飼育訓練標準等ノ調査

二、注意事項

- (一) 成功ノ第一義ハ從事員ト鳩ノ十二分ナル体力気力ノ保全ト
- 周密ナル馴致ニアリ鳩ノ保健トハ換言スレハ優越ナル飛翔力ノ保全ナリ
- (二) 周密ナル馴致トハ切ヲ急クノ余リ過早ナル訓練躍進ヲ行フコトナク當ニ鳩舎馴致ノミナラス五六軒園内位ノ近距離訓練ヲ頻行シテ(父島馴致ノ完成)充分ノ自信ヲ得テ訓練距離

1926

ノ躍進ヲ行フヘシ馴致半成ノ後距離ノ延伸ヲ行フコトハ徒
ラニ鳩ヲ矢ヒ實用期ニ到達スルノ期ヲ遲カラシメ鳩ノ心理
ニ惡影響ノ来タシ或ハ全滅ノ失敗ヲ招致スヘシ訓練
ハ近繁遠簡換言スレハ近距離ハ心小ニ遠距離ハ膽
大ニ実施スヘキモノナルコトヲ銘記セヨ

(イ) 豫メ興ヘタル訓練方針ハ概シテ適當ト信スレトモ必スシモ

墨守拘泥スルヲ要セス(四) 項ニヨリ実情ヲ觀察シテ機宜

実施スヘシ特ニ休練期日ノ配當ハニ留意セヨ能力増進

ニ至大ノ關係アレハナリ方針中ノ後半期遠距離訓練ニ

入ラハ假令距離ヲ伸ハストモ休練日ヲ相當ニ與フル必要アルヘシ

(ニ) 機上放鳩ニ充分慣熟セヨ斯項ノ良否ハ能力及ヒル後ノ訓練

ニ至大ノ影響有リ及ホスモノナリ

如上注意事項ヲ体得恪守シ訓練方針ノ要領ニヨリ

実施スルコトヲ得ハ所共期間ニ訓練ヲ終了シ一五ノ料
両線ノ実用ニ供シ充分ノ成果ヲ擧ゲ得ヘキコト殆ント確信
シテ疑ハス

諸子ハ既得ノ技倆ヲ十分ニ發揮シ馴致管理保教保健ハ
小心周密ニ訓練、案劃、交渉等ハ大膽果敢ニ必成ヲ
確信シテ邁往努力シ軍場將來ノ發展ニ資センコトヲ期
セヨ

1928

一九五

新編

吉年正月
發布
軍防局
深泉

撞隊司令部

軍用紙 1 件

一、米海軍上中校 侯之 龍章

一、新海軍之甲冑

平旦明書

右奉付上

近而如諸野に十月中、御遊幸あり

獨立

十三年 東海善才 尺二寸 朱書 古蹟 藏

模造半葉十一行野紙

軍用

1929

海軍



大正十五年一月十五日

市川横須賀海軍航空隊司令



横須賀海軍省軍務局第一課長殿

一、米海軍軍用鳩ニ関スル調査

一部

右迄却ス

一ノ一七 敬音、田光

市川横須賀海軍航空隊司令

十三年一月十五日

1930

13

No. 1

NISHIKI

大正十三年十二月二日

朱書の所見見拜敬致候。小生の認めし意見、其の
行文体をふさず、意を盡さず、小生の真意を御了解
せられざる点ある様、思召候間、再々申上候。

「軍鳩」実用的價值ニ就テ一向報告ナク、有之候が金
剛より毎月、艦隊司令部と横須賀見航空隊とに訓
練報告を提出し、軍鳩の實用價值等は其都度報
告し置きたる處に候。尚、目下二の一年間の實驗を
基礎とし、「軍鳩」軍事上、用途等ニ関し、報告作製
中に候。一は不日、航空隊を全て、御目にかけ得るこゝに存
候。軍艦金剛の軍鳩研究はすべて「横、航空隊」の指令
の下にある。故、直接の報告等は何等致さハリし
次第に候。先日の小生の意見の如きも、「レポート・サーヤット」

1931

の観ありて、いかゞと思案せしも、現状、熟視（かく）し、思案
所を申上りし次第に候。その辺はよく申す承の程、願上候。

「又今迄相当の設備人員ヲ有し居ル処、制度等ハ第二
問題ナル」と云はるゝも、この處は再考煩（わづら）はく
候。過般の大演習に際しては、館山の飛行隊、其地
用の軍鳩にも不足を感じたる程、度（たび）に候はりや。
軍事上必要な鳩数をも常備し得らるる程、小
規模の如く思ひ候。

制度等は亦（また）「一」と云はるゝも、よく実狀を申承る下され
度し。例へば、軍艦全副に於ても、小生の如きは、

砲台令隊長たる本職ありて、軍鳩研究のため、特に
時間を与えらるゝにあらす。配置数、直勤務等
の餘暇に、重々本務に關係せざる時間と承るのみ。

1932

軍艦研究に従事し得る状態^トなり。軍艦全副軍艦
 研究主任たる名符は、單に航空隊に対する名符として軍
 艦全副内に於ては、單に「艦兵係りの士官」^{艦兵係りの}、輕き意味
 に過ぎざる現状に候。作業地等にて本務多忙なる
 時は「軍艦」の方は止むを得ず、「兵員委せ」となりしこと
 も有之候。即ちかゝる人員の不足、士官の手不足、かゝる
 制度にては、折角の新しき研究も徹底的に實施する
 能はず。従て諸事万事、ヨリ加減となり、消極的とな
 りやすきと思ひ。士官が率先して研究に従事するさ
 の絶対必要を痛感し、意を決して、艦長と士官多山
 大佐に専断の軍艦係士官に轉職せんと、希望を
 表示したる次第に候。小生の此意は、もう大し、積極
 的に進まざるべからず」にありて、「制度が不備なれば
 手をつけない」と云ふ意には無之候。幸して、小生は軍艦

1933

に対し、特に興味を有し、軍鳩の将来に対しては聊か抱
負を有するものに見ゆ。本務を有する士官が兼職
いかも本職の餘暇を以て、軍鳩研究に任ぜざるべから
ざる。現在の制度上は、全然不賛成に候。

但し、現在の制度設備人員にて、最大効果を發揮せんか否に
とるべき手段方法に就ては、及びす乍ら、苦心致候候。
小生の意見は、今如此に積極的に活発に研究し得る様
にすべしを改善すべしと有之候。

尚適當の時機に親しく市意見と同一度依頼申上候

早々

十二月三日

金剛

石川大尉

原中佐殿

1934